

門前道路の栗岡利吉

古藤田

太

(会員・弥生町江良)

佐伯城下から臼杵、津久見方面に抜ける道は古くから開けていたようである。

明治二十三年の地図を見ると、奥の鏡峠から大坂本に通ずる道は、当時の大道であったことが解る。藩政時代に於て参勤交代の帰途、佐伯藩主はしばしばこの道を選んで通ったということである。

然し、大坂本に出て、矢越の峠を通って佐伯城下に出る行くよりは、門前越を通過して佐伯城下に出る方が随分近道であることを知って、土地の人達は何時の頃からかこのようなコースをつくっていた。地図に載らない所謂^{うさぎみち}兔道である。この兔道を改良、拡張して通行人の便宜をはかった人があった。

床木村大向の御手洗慶次郎氏の四代前の祖に吉蔵という当主がおり、その弟に利吉が居た。

文久年代(一八六一—一八六三)の頃、利吉は若くして長崎の西山町に在った栗岡家に養子にゆき、資本は要るが商売の花形であった倉庫業と、文明開化の氣運に湧く長崎での土木請負業を営んだ。

利吉は天保十一年(一八四〇)の生まれであるから活躍した年代は明治初年頃に当る。

徳川の永い鎖国政策の余波で、長崎には支那人やオランダ人が特に多く住み、我国の経済発展にも寄与していた。鎖国時代における支那人や、オランダ人との貿易は多彩なものであったが、金(小判)銀、銅の輸出は、時の幕府の政策に左右されたにしても、樟脳や、肥前物を中心とする各地の陶磁器の輸出はおびただしいものであった。驚くことは、「ツーン・ベリー」の日本紀行によると、酒、醤油がオランダの外、インド、ペルシャ、ア

ラビヤ方面に盛んに積み出されたという。輸入品は生絲の外、衣服や食糧品等が多かったが、懐かしいものとしては、莫大^{モリヤス}小、カステーラ、金平糖、煙草があった。

こうして長崎は、平戸と共にたった二つの日本の門戸であり、窓口であった。相互の貿易品は湾内の岸壁に立ち並ぶ白壁の大倉庫群内にうす高く積まれていた。

こうしたことで栗岡家の倉庫業は益々発展の一途を辿った。

また明治初めの長崎は、文明開化の気運と荒々しい建設の槌音はやむことを知らなかった。この当時、土木事業の技術は、長崎のような先進地、文化都市しかあまり必要としなかったのではあるまいか、それだけに業者も少なく、利益も大きかったに違いない。このような環境は栗岡利吉に巨万の富を積ました。

利吉は中年をすぎた明治二十七年（一八九四）頃、佐伯城下に向う人々の不便を救わんとして、この門前越えの道を開設することにした。

この頃は建設機械、工具は零にひとしい。全く人力で山野を千^ちに亘って拓き、道路を開設することは大事業であった。掘割作業や道の拡張は並大抵の業ではなかつ

た。利吉は手馴れた工人達を長崎から連れて来ていたと思われる。工事の所要日数は解らないが、相当の日数が必要であったに違いない。しかも一人で賃金・雑費は勿論、すべての工事費を負担した栗岡道路であった。

現在の床木隧道の斜め上を栗岡道路は通っている。

床木隧道の碑文に「佐伯、臼杵の孔道は必ず門前阪に由る。阪は狭急、人馬之に苦しむ」と誌されているが、この栗岡道路を指すのである。

時代の進展は、産業や、交通機関の発展で道路の改良を求めてやまない。

栗岡道路ができて八年程経ち、南海部郡長狭間重^{しげつ}亜、明治村長河野豊等が中心となって事業を企画し、五ヶ月を費やして現在道路が竣工した。明治三十五年のことであつた。

この時の工事費は五千九百円、地元負担金は千四百七十五円（土地代共、工事費の四分の一とある）南海部郡はこれに百五十円の助成をし、栗岡利吉はこの工事に参百円を醵金したのである。

年代は多少違うが、天は東西二ヶ所の佐伯の地に二人の篤志家を選んで道路をこしらえさせたことは驚くべき

ことであつた。

この栗岡道と、堅田の中山峠道である。栗岡道も中山峠道も共に東西から城下に入るものであつた。

享和年代（一八〇一—三）堅田の長谷に天野辰兵衛という人が居た。大量の椎茸を遠く上海、香港、マカオまで運び、書画骨董に替えて、これを京大阪で売り捌いて巨利を得ていた。佐伯藩も度々寄進（冥加金）を申入れたといわれる。

堅田郷の人々が佐伯城下に出る場合、必ず中山峠の嶮岨な道を通らなければならなかつた。勾配が急で、雨でも降ろうものなら亡んで登れない。また土砂崩れが多発して通行できなくなることがしばしばであつた。

天野は堅田郷の総出の夫役を企画し、大改良工事を行った。その費用は総て天野が負担したばかりか、連日の中食まで提供した。この改修の結果、交通が便利になり明治二十四年蒲江道路が開設され、かつての中山道は昔語りとなった。しかし中山峠道は、栗岡道と同様、人々に長く恩恵を与えたのである。

栗岡利吉という人は郷土のために気を配つた篤志家で、仙床寺にも見事な斗帳を寄進したが、現在なお使用中と

のことである。

私事にわたる話になるが、当時御手洗家は貧しく、小さい家であつたとかで、栗岡は生家のために、六間に十一間という大家を新築したばかりか、築地塀は長崎から専門職人を呼びよせて造らせたものだという。

長崎から郷里に帰る際は、竹田までは長崎の人達が駕籠でおくり、竹田からは床木の人達が出迎えて駕籠を担いだというから大層な人であつたに違いない。

弥生町内で稀に見る成功者栗岡利吉は、このように明治初年に生きて、何時までも郷土を忘れず、道路を開削し、社会に奉仕した見上げた人物であつた。

明治三十四年一月二十四日、六十二才を以て死去した。法名は、法照院知宝善利居士 とある。

